

～平成家族物語～舞台芸術によるまちづくりプロジェクト第1弾

『東松山戯曲賞』選評

選定委員：瀬戸山美咲氏

『枇杷の家』は、登場人物たちがひたすら食べて飲んでしゃべっているのがまず面白いと思いました。好き勝手喋っているようでちゃんと相手を必要としている会話になっていて、生き生きしたやりとりの中から3人の女性たちと1人の男が自然と浮かび上がってきました。血縁のない女性たちが一緒に暮らす様子は「平成」と「家族」というテーマをもっとも体現していると思います。老齡に差し掛かる女と男たちが、あーだこーだ言いながらも前に向かって生きていく様は、若い人が観たときも希望が持てる作品だと思い、一番に推しました。

『ひまわりは遠く』はとても丁寧に描かれた作品でした。過去を振り返る物語でありながら、現在の葛藤に比重が置かれていて好感が持てました。特に50代後半になる主人公がその年になっても母の愛を求め、誰かに奪われることに不安を感じるという描写にはハッとさせられました。夫から言われる「いい加減、娘は卒業せんか」という台詞も印象に残りました。全体としては回想シーンのインサートが少し多すぎて説明的だと感じました。もう少し想像する余地を残してもよいかもしれません。

『離陸』は会話が軽妙で、読んでいてワクワクしました。タイトルも「旅立ち」とかではなく「離陸」というのが、別れや出発をドラマチックに描きすぎない感じがして面白いと思いました。妻が結婚した状態のまま自分だけ沖縄に移住しようとする部分も、現代の家族のひとつのかたちを提示している感じがします。

『空で千の鈴が鳴る』は東松山カントリークラブに宇宙人がやってくるという設定が愉快でした。ぶっとんだ設定ながら、光る子供を人々が隠したがるという人間の行動には真実味があり、最後まで信じて読むことができました。全体の構成としては、宇宙人が来るまでの描写が長すぎるように思います。もう少し早く事件が起きて、主人公の目指すところが見えるとよいと思いました。